

ジョージ・E・アルブレヒト

——同志社初期の宣教師——

一八八〇年代の終りにかけて、組合教会の中には、高等批評神学に対する興味がだんだんと増していった。その高等批評神学は、当時ドイツを始めとヨーロッパ各地で盛んになっていった。その頃日本における最大のプロテスタント宗派であった組合教会の指導者たちは、そのほとんどが熊本バンドの一員であり、同志社と深い関係をもっていた。彼らの独立した精神は厳格なカルビニズムと、同志社の年輩の宣教師たちから教えられた遂語霊感説を受け入れることを良しとしなかった。従って新しい神学が教会に浸透し始めた時、それを最も熱心に信奉したのは熊本バンドの人々であった。

聖書を考察した。彼らの聖書についての批判は聖書の絶対的概念についてであった。聖書は人間が、それを理解する程度に忠じて、神の啓示の記録であると彼らは感得した。従ってその靈感は著者の中にあつたが、聖書の頁そのものの中にあるのではない。これら聖書の著者たちは、解釈の仕方、強調の仕方における間違いを免れなかった。著者は、彼ら自身の時代を通して真理を見ているのであり、必ずしも教理的に一致していなかった。聖書も、すべての歴史的な著述が陥りがちな不正確さを免れてはいなかった。その意味において、聖書は、終始一定の靈感を受けた教えの本というよりも、彼らにとつては、むしろ宗教上の文学であつた。

もう一つの大きな関心事は、神観についての定義である。これらの神学者たちは、自然と超自然の間に引かれていた鋭い境界線を抹消しようとした。神は、この世にあるすべてのものと、その存在と発展の中に内在するものと、彼らは考察した。ただ単に、世界に君臨する存在ではなかった。もはや、お互いに排折しあう二つの領域、つまり自然界と超自然界とは存在しなかった。

このような神についての見解に立ち、キリストの神性についての再評価は自然の成り行きであつた。金森通倫、横井時雄のような人々は、キリストは「単に秀れた特性をもつた宗教的な教師」①であつたと考えた。もちろんこれは、当時の日本における大部分の進歩派の人々がこのように解釈したというのでは

ポール・グリーシー

ない。が、これらの進歩派の人々は、キリストは、分割された宇宙の神の側にほとんど全面的に置かれていてと考えて、キリストの神性を強調する確信を持ちながらも、ニュージーランドの正統神学については、これを拒否した。しかし金森通倫等のごとく、キリストの二重性を否定するまでには至らなかった。宇宙についての古くからの分割の考えは、無くなっており、それと共に、神秘的に完全な人間と融合した完全なる神としての、キリスト観も無くなっていった。これらの進歩的なクリスチャンにとって、キリストは、人類最高の存在として留まり、それがために、神性の最も尊厳な啓示でもあった。

これらの神学上の考えは、J. D. Davis や D. W. Learned を含む多くの宣教師たちは異端と考えた。しかしアメリカン・ボードの日本宣教師団の中のある人々はむしろ同情的であった。George E. Albrecht は、宣教師団の中で、もっとも進歩的であったが、これらの進歩的な解釈に対して、全般に同情的に、これらの人々の代弁者となり、組合教会の進歩派と宣教師団の指導者たちとの仲裁者となった。同志社への彼の貢献と共に、この

ことは非常に意義のあることであった。

ジョージ・E・アルブレヒトは、一八五五年八月十二日にプロシアのポーラウで生まれた。プロシアを去って、アメリカに行く前に彼は、ドイツのプレスローとウルムで学校に通い、一八七四年に、ベルリンの士官学校を卒業した。アメリカ合衆国に移住した後、彼は、一八八二年にオベルリン神学校を卒業し、一九〇〇年には、同大学から神学博士称号を授けられた。按手礼式の後、彼は、アイオワ州のラベンポートにある組合教会の牧師の職から国内伝道会の監督官に昇格した。ここでは、特にドイツ人の移民の間に責任をもっていた。彼は、その後シカゴ神学校ドイツ語科の教授として呼ばれたが、その職には長く留まらず、日本におけるアメリカン・ボードの宣教師の一人として、働くことになった。彼と妻のレオノーラは、一八八七年七月に、日本に到着し、最初は新潟に、その後前橋に住んだ。そして一八八九年から一九〇四年に日本を去るまで、彼の仕事は、同志社神学校でなされた。

一八九一年神学論に関して書いた中で、アルブレヒトは、次のように述べている。「私

は他の宣教師たちのように、この神学上の問題が私たちの上に起こったことを残念だとは思っていない。私にとっては、これらのすべての問題は、むしろ健康的な知的生活の印であって、私たちが、天使たちに守護されなければならぬ地獄からの喘ぎ等ではない。この神学上の興奮の一吹きは、私たちに、次のことを示してきてくれたに過ぎない。つまり私たちは、これまでなされてきた以上に論理的な仕事にとりくむ用意ができていなければならないということ」^④

この後すぐに、アルブレヒトはこの問題に関して次のように書いている。「福音派教会の宣教師たちは、何もせずじっと座って、神学論争を無視するわけにはいかない。闘いの火ぶたは切つて落とされたのだから、我々は闘わなければならない。日本のキリスト教会は、この神学論争の最中に、その信条を鍛え上げるといふ熱望と努力とを惜しんではいけない、またそうすべきではない。」^⑤彼は、この闘いに入っていくことを躊躇しなかった。アルブレヒトの神学理論は、彼の著作のいくつかを外観することによって、最も良く理解される。彼の神学理論の中心になっている

のは、次の考え方である。キリスト教の真理は他の国の文化や、時代の神学的、あるいは倫理的な装飾品を背負わされてはならない。何故ならば、そういったものは、日本人が教会の教えを受け入れることの妨げになるであろうから。この信念に関して、彼は、次のように述べている。「宗教上の真理と、それを包んでいる形而上学の衣との間に区別をつけることが、いかに大切であるか、私には分かる。私は、宗教上の真理を、固執することには、何も困難はないであろうと思うが、後者の方は、余り強調し過ぎてはならない。この点において、私は、当地の宣教師たちの幾人かと意見を異にしているのではないかと思う。」④

高等批評神学について、次のように書いている。「私の立場は、アダム・スミスによって代表される宗派のものである。つまり聖書を批評するに当たっては、敬虔に、慎重に行う義務と権利があると信じる。」⑤ 哲学的にはアルブレヒトは、自分自身を有神論的進化論者として考えている。

彼によれば、「もし私たちが、キリスト教を、日本の知識層に勧めたいと思うならば、

それを、五世紀や、十五世紀の教条的な叙述の中で、示すのではなくて、現代の衣を着せて、示さねばならない。私は、すべての他の学問と同様に、神学においても、進歩があると信じている。私は、神の聖霊が、今は、私たちをこれまで以上に『すべての真理に』導き入れていると信じている。私の最大の努力は、福音の信仰と熱意が、科学的研究や神学上の進歩によって失われないことを、実践と教えをもって示すことにある。真理の正しい把握は、福音的情熱に劣らず、み国の成就にとって、大切なことである。」④

「人の子」と「神の子」という言葉の意味を説明して、次のように書いている。「両方を、救世的な意味をもって。後者は、父なる神とイエスとの間の完全な倫理的同一性を表現している。」⑥ イエスの全知について、次のように述べている。「イエス自身は、自分が、全知であるのは言わなかった。従って全知でなければ、知的な誤りの可能性がある。しかし私は、知的な誤りと、道德的宗教的な誤りととの間の相違を強調したい。」⑧ キリストについて、アルブレヒトの到達した結論は、次のようなものであった。「だから

私は、キリスト自身の言葉どおりの、キリストを信じる。また、神と完全に一体であるということを、知っていたものとしてのキリストを信じ、また、神の国の聖なる王として、聖なる救世主として、また、人類の聖なる審判者としてのキリストを信じる。」⑨ 三位一体の概念について、彼は、次のように述べている。「私は、その考えが、いわゆる『正統派』の基準に達するとは思わない。しかし、それは、私が、私の信仰と理性とを、対立させずには考えることができない、神の三位一体存在の概念である。まさに、この考えこそが、キリストの神性、聖霊の人性と神性、しかも神は唯一であるということ、これが、私に、一貫した信仰を形成する助けとなってくれ。」⑩

アルブレヒトが、他の宣教師の人々と、意見を異にし、組合教会や、同志社の進歩派の人々と意見を同じくしたのは、神学の領域だけではなかった。教会の行政上、または、財政上の指導に関して、一八九三年までに、宣教師団と、日本の教会の指導者たちとの間の不破は、増してきていた。アルブレヒトは、危機がさし迫っている時なのに、宣教師団

が、確固たる態度をとらないことに反対していた。彼は、ボストンの宣教師団長に宛て、次のように書いている。「働きの最大の効果を上げるには、財政面を、大幅に、組合教会に任せることが必要だと私たちの幾人かは、思っている。私たちが、金銭のことに携わることが少なければ少ないほど、より良く、日本人とやっけて行くことができるだろうと思ふ。」^⑥

行政に関して、組合教会の指導者たちの間で、不安が大きくなってきたのに対し、組合教会の、一部の指導者が唱えている、現代的な神学上の思想について、宣教師団の中の、保守的な人々は、これ以上の妥協を避けるため、一層の統制が、宣教師団により、実行されるべきだという態度をとった。アルブレヒトはこの傾向に対して極力反対した。「現在の当地における方針は、以前に増して、我々自身の手で、しっかりと統制し、日本の教会に以前ほど力を与えないことである。また、前回の宣教師会で、次のようなことが、公けに述べられた。もし宣教師会が財政的な力を失うならば、その影響力は控え目にみても、非常に衰退するだろうと。私は、卒直に申し

上げる。もし、このような事態が起こるならば、私は、日本における宣教の仕事は、終ったと言わざるを得ない。教会に関して述べれば、私たちが、二、三の指導者の言動を強調するあまり、大きな過ちを犯している。私たちは、もっと多くを、教会に任せるべきである。彼らは、私たちの信頼に値する。私たちが、手に入れてきたものは何でも、私たちが、挽ぎ取ってきた。彼らは、不承不承に与えられたと思っている。私たちは、進歩的な指導者の幾人かを、異端として扱ってきた。彼らを、異端者呼ばわりして、私たち自身を、正統と考える教えの囲いの中に閉じ込めるのは、非常に簡単なことである。しかし多くの宣教師によって、とられた態度は、私たちが、彼らを遠ざけることになり、そして、事情をさらに難かしくしている。」^⑦

確かに、この引用した書簡は、アルブレヒトが、当時の日本の近代神学思想と、日本人による行政上の独立に、同情的であったことを、示している。彼が、これらの立場を、取ることが、難かしかったのは、先輩の宣教師が、それを卒直に受け入れることができなかったためであった。ラーネッドは、アルブレ

ヒトの神学思想について、次のように書いている。「アルブレヒト博士は、あなたに『三位一体についての考え方』という講演の写しを送ったと思う……。彼の考えは、キリスト（少なくともイエス）は、神が彼の中に啓示されている限りにおいて、ただの完全な人間であるとしている。そして、神観についての三側面、すなわち、（神御自身、客観的に啓示された神、各々の人間の良心の中に、御自身を啓示された神）に、三位一体論を考えようとしている。私から見れば、それは、要するに、神について、完全に数字的な一体を強調し、そのために、他のすべての事がらを犠牲にしているように思われる。彼の三位一体論は、組合教会の考えを、非常に良く表現していると思える……。」^⑧

アルブレヒトの非伝統的な神学思想に、一番深く心を乱されたのは、J・D・デヴィスであった。デヴィスは、アルブレヒトの三位一体論に答えて、次のように書いている。「私は、三位一体論につき、彼とじゅうぶん話し合った。彼は、キリストを神そのものとして礼拝している、とのことで、彼が、心の中でキリストに対して忠実であると、確信し

ます。彼はキリストが、その誕生以前に、父なる神から何らかの、別個の位格を授けられたとは、考えていない。しかし、キリストの位格が、完全に新しい創造であると考えている。キリストの死後の立場については、彼は、明確に啓示されていないと答える。キリスト御自身の次の聖句『栄光の中にすべての天使を、従えてやって来る……』また、パウロの次の言葉、『神の右に座し給う』は当時の考えに対して適応した表現であり、まったく、文字通り受けとるべきでない……。これらの見解は非常に驚くべきものである……。

罪に関しては、それは、動物性の残骸であり、人間の進化によって次第に、人間性は高揚されていくとし、キリストの贖罪に関しては、神の愛の顕現の他、何ものでもないとし、当然、審判に関しては、同様に、低い見解を持っている。『すべての人は、自分自身の中に、神性の閃を持っており、その故に、ある時ある所で、すべての人の完全な救済となつて働くのである……。』卒直に申し上げると、もし私が、まだ若いならば、これは、自分にとって重大な疑問となることであろう。つまり、キリスト教の偉大な根本的真理に対

して、忠誠を誓うため、他の教会を探すことができるかどうかという疑問である。しかし、私は、余りにも年をとり過ぎ、私の心と人生は、私たちの宣教の仕事と宣教団と密接に結びついているので、些かなりとも道を踏み外すことはできない。⑭

デヴィスの目には『罪悪観の低下』と『審判観の低下』とは、権威と道徳とを失墜せせるといふ、悪い影響を持ったものとして写つた。さらに、次のように述べている。「このような考え方が、寛大に取り扱われ、そして教えられるとすれば、若者の幾人かは、懷疑の城に閉じ籠り、絶望という巨人に捕えられたとしても、何の不思議もない。⑮

在日アメリカ宣教師団に、直接深い影響を与えた一つの出来事が起こった。それは、新神学思想が、道徳的墮落をもたらすという、デヴィスの見解を、如実に強めることになつた。アルブレヒトは、一九〇一年の春、妻と家族を、アメリカに送り戻さねばならなかつた。こういうことは、当時日本で働いている宣教師たちの間では、良くあることであつた。が、どんな事情であれ、当人にとっては家族を送り帰すということは、非常に心落ち

することであつた。

アルブレヒトは、ひとりで京都に残り、中学校長としての行政的な仕事と教育に専心し、色々の出版物に、彼の神学上の見解を述べた。一九〇三年の秋、彼は、アーサー・W・スタンフォードという、神経障害に苦しんでいた一人の宣教師と一緒に短期間アメリカに戻つた。日本に帰つて間もなく、宣教師連盟の会合が、一九〇三年十二月十五日に大阪で開かれた。京都にいたすべてのアメリカン・ボードの宣教師たちは、その会合に出席したが、アルブレヒトは出席しなかつた。彼は、京都にいたが、次の理由で欠席した。それは、「アメリカからの船で知り合った人と、約束があり、その人が、偶然にもその時京都に滞在していた」⑯とすることであつた。その日の午後三時頃、ある一人の学生が、アルブレヒトが「下町のあるいかがわしい場所に入つて行くのを見た。少し時間が経つて、この学生とあと一人か二人の学生が、巡查を連れて調べに行き、次のことがわかつた。アルブレヒト氏は、本当に彼の行くべきでない所に行き、提供された快樂(?)に耽つていたことが明るみに出た。この秘密を知つていた学

生は「一九〇四年」一月二十八日に、アルブレヒト氏に、そのことを告げに来た。その夕方、彼は、京都を去った。⑩

アルブレヒトが、売春宿に行ったということは、「その時が、初めてではなく、以前から何回か訪れていた。」⑪アルブレヒトのこの行為のため、ある宣教師たちは、特にデヴィスは激変と衝撃にうちのめされた。デヴィスは、アルブレヒトが、アメリカ行ききの船を待っている横浜港まで出向いて、「彼を慰め助けようとした。」⑫しかし、慰めを与えるどころか、デヴィスの見送りは、一層、アルブレヒトの気持を苛立たせることになってしまった。アルブレヒトとデヴィスのこの会見について、D・C・グリーンは、次のように書いている。「デヴィス博士の見送りは、その事件を再び生々しいものにし、暫くの間、アルブレヒトの気持を苛立たせたが、デヴィス博士が去った後、彼は、再び自制心を取り戻したと私は思う。」⑬

アルブレヒトの「墮落」の経験は、正統派の神学と倫理が、間違っていないかったというデヴィスの確信をさらに強めるものとなった。一九〇〇年にデヴィスは、次のように書

いている。「私たちは、これらの試練の時に私たち一人一人の義務が何であるかを、私たち自身で、決めなければならぬ。そこには一つの大きな慰めがある。それは、神の眞実は、覆されることはない。福音の偉大な根本的眞理、すなわち、聖書の本流は、いつの時代にあっても、教会の力となってきたのである、そして、それは、教会に勝利を与えた。そこに根ざす人は、永遠の眞理を獲得し、無限の神は、彼と共に給い、必ず勝利を得るのであろう。」⑭アルブレヒトの経験は、デヴィスに、以前にも増して、このことを強く確信させるに到ったのである。

この事件に対する日本人の反応は、はるかに柔軟なものであった。D・C・グリーンは次のように書いている。「日本人が、驚いたのは当然であったが、彼らは、私たちほど眞剣に受け取ってはいない。この事件の中に、宣教の仕事に対して、重大な障害があると、彼らが考えているとは思わなかった。」⑮

アルブレヒトは、面目を失い、アメリカン・ボードから脱退することを、余儀なくされたが、彼の神学上の研究と、組合教会と同志社内の神学論争の介入は、日本における進歩

的の神学思想の設立に貢献するところが大きかった。特に組合教会と同志社において、古い保守的な神学上の立場は、除々に衰えていった。デヴィスは、一八九六年から一八九九年にかけての同志社危機と、アルブレヒト事件の衝撃と緊張感から、心身共に疲れ、もはや神学校では、何の現職にもつかなかった。もちろん、彼は実践神学を教え、後に理事会の委員となった。同志社の組織神学の教授として、アルブレヒトの後任は、S・L・ギューリックであった。彼は、若い神学者で、一八八八年に宣教団に加わり、アルブレヒトの神学思想をじゅうぶんに受け継いでいた。

アルブレヒトは、アメリカに帰り、アイダホで、国内伝道の仕事を始めた。彼は、その能力に適した仕事につくこともできず、日本への再赴任を勝ち取ることもできなかった。彼は、再び家族と一緒に住み、ミネアポリスで牧師の職についた。一九〇六年十月二十四日、五十一才で破傷風のため、そこで亡くなった。

彼の追想録には次のように印されている。「立派な研究者であり、絶えぬ努力家、この者は、洗練された知性の鋭さと愛情深い心

の暖かさ、そして、立派なクリスチャンの熱意を持って、神学校とその学生たちの教育に、すべての才能を捧げた。この者の下で学ぶ特権を得た学生諸君に幸あれ。この者は、その時代の流れを良く理解し、その聖職に励み、常に、自ら進んで、人を助けた。この者を知る者は、皆この者を愛し、敬うことである。」^② (熊本大学外人教授)

* この研究で引用のすべての書簡は Harvard University の Houghton 図書館で、アメリカン・ボード公文書集の中に保管されている。これらの資料の使用許可は、ユナイテッド・チャーチ・ボード外国伝道部に譲渡されていたが、現在、アメリカン・ボード委員会外国伝道部に委託されている。

ポール・グリーシイ氏は、一九七三年
 "THE DOSHISHA, 1875-1919:
 THE INDIGENIZATION OF AN
 INSTITUTION" と題する論文で、
 ロンビア大学、ティーチャーズ・カレッジから、学位を受けられた。

(編集部)

(注)

- ① Kanamori, Tsurin, "The Present and Future of Christianity in Japan," Japan Weekly Mail (October 3, 1891), p. 413.
- ② G. E. Albrecht to N. G. Clark, April 9, 1891, American Board Papers.
- ③ G. E. Albrecht to N. G. Clark, June 7, 1891, American Board Papers.
- ④ G. E. Albrecht to J. L. Barton, April 27, 1902, American Board Papers.
- ⑤ G. E. Albrecht to J. L. Barton, September 5, 1902, American Board Papers.
- ⑥ Ibid.
- ⑦ G. E. Albrecht to the Editor of The Standard, October 16, 1902, American Board Papers.
- ⑧ Ibid.
- ⑨ Ibid.
- ⑩ G. E. Albrecht to J. L. Barton, November 4, 1902, American Board Papers.
- ⑪ G. E. Albrecht to N. G. Clark, September 21, 1893, American Board Papers.
- ⑫ G. E. Albrecht to N. G. Clark, March 10, 1894, American Board Papers.
- ⑬ D. W. Learned to J. L. Barton, November 13, 1902, American Board Papers.
- ⑭ J. D. Davis to J. L. Barton, December 6, 1902, American Board Papers.
- ⑮ J. D. Davis to J. L. Barton, October 29, 1902, American Board Papers.
- ⑯ D. W. Learned to J. L. Barton, March 26, 1904, American Board Papers.
- ⑰ Ibid.
- ⑱ D. C. Greene to J. L. Barton, February 9, 1904, American Board Papers.
- ⑲ J. D. Davis to J. L. Barton, February 4, 1904, American Board Papers.
- ⑳ D. C. Greene to J. L. Barton, February 9, 1904, American Board Papers.
- ㉑ J. Merle Davis, Davis, Soldier Missionary (Boston: The Pilgrim Press, 1916) p. 343.
- ㉒ D. C. Greene to J. L. Barton, February 9, 1904, American Board Papers.
- ㉓ The Christian Movement in Japan, 1907, p. 280.

若き学徒

西田幾太郎の新島観

秋山哲治

新島先生を知り一世の偉人となすのである。
安政、嘉永の秋に当って、わが国人は海外にすぐれた国のあることを知らず、高野安眠傲然自ら神州と号し、外国人を見れば戎狄と呼び禽獣となして排斥した。上下、賢愚共に皆然らざるはなかった。一人絶えず海外を注目する者があった。独り先生は慧眼で夙によく宇内の大勢を知り、洋行の止むべからざるを悟った。

さきごろ、西田幾太郎全集第十六巻を通覧する折、「悲新島先生逝去文」と題する一文にめぐり会うに至った。西田博士の若き日、第四高等学校の前身である第四高等中学校に在学中、「校尊会」の会誌に発表した随想の一つである。校尊会は明治二二年五月（先生満二〇才）から翌年七月までの間に級友の間で結成されたもので、会員各自がエッセイや詩歌を作って回覧し、率直に批評を書き込みお互いに思想を鍛え、詩文を練り、交友を密にし、かつ研修につとめたものと説明されている。（全集十六巻六八三頁）

わが国の生んだ独創的哲学者として令名の高い西田博士の若い目に、新島先生がどのように映じたか、純情の心にどのような印象を

与えたか多大の興味を覚えたのであった。西田博士にこのような文稿のあることは同志社人にあっても多く知られていないと思われるので紹介することにした。原文は漢文で記述されている。そのまま転載するのでは印刷屋を泣かせることにもなろうし、あるいは、若い者に敬遠されることになろうかと思ひ、意訳をすることにした次第である。

智者には遇うことができる。勇者にも遇うことができる。智あり、かつ、勇ある者には多くは遇われないが、智勇を備えた者には遇うことができよう。智、勇があつて徳のある者にはまだ遇つたことがない。私はここにおいて

奮然、天下に先んじて大洋を越え、久しく米國に留まり、広く欧州を巡り詳しくその風土を觀、深くその文物を考え、國政の據るところを究め、教育の基本とするところを察した。帰国するや、天下に先んじて私立大学を起こそうと欲し、焦心苦慮、南舟北馬、ほとんど寸暇もなく活動し遂に適宜な措置をなし、計画は功を奏し成就の日もまさに近づいたのであった。嗚呼、明智、神に通ずるべきであれば、このようなことが、はたしてできるであらうか。

先生が箱館を脱した当時は、攘夷論は大いに盛んであり、壮士、俊傑は劍をにらみ腕を扼し、あるいは、宝刀いまだ洋夷の血を染めずと言ひ、あるいは、腰の宝劍は躍つて声あ

りと吟じ、腥風慘慄として殺氣は殿々の有様
いやしくも西洋に好意を示す者、井伊直弼は
倒され、佐久間象山は野に屠れた。のみなら
ず、嚴重苛酷な法律が前後をとりかこんでい
た。いやしくも海外渡航を計る者があれば、
たちまち斬刑に処せられるのである。先生は
身をもって卓然として世論に背き、死を恐れ
ず、苛罰を顧みず、決然親を辞し、断然友と
別れ、万里の鯨波を越え、独り未知の地に趣
いたのである。

その地に達したときは財布には一銭を残さ
ず、周囲を顧みて助けを乞うべき者もない。
困窮切迫、人の召使となつて僅かに食物を得
た。千辛万苦、漸くにして学校に入学、その
志を得た。学校を卒業して日も浅く、孤独一
人の身を以て早くも同志社を設立しようと欲
した。それが難事業であることは、けらやあ
りが大山を積もうとするようなもの、みみず
が黄河を掘ろうとするようなものである。か
つ、その教育は異教を主とするから誹謗する
声は騒々しく四方に起こつた。先生は卓然と
して顧みず、壯図は愈々大であり、堅志は愈
々固い。困難を犯し艱難を凌ぎ誓つてその志
すところを成し遂げようと欲した。臥薪しよ

うたん、終始一貫、終に眇々たる同志社をよ
く今日の盛大に至らしめた。

嗚呼、大勇万人に秀れるものでなければ、
このようなことは為し得ないのである。

先生の容貌は嚴肅であり、これをみれば、
夏でも人は襟を正すのである。また、天性温
和であつて、人を愛し人を包容し、これに接
すれば桜花のような艶があり梅花のように香
気がたつた。外に對し寛、内に對しては嚴
その度を失わない。そこで異教の士といえど
も有徳の君子として先生を推挙するのであ
る。

先生は、また、信教の念が深く、善を行う
の志が厚い。行ふことは日月のように明白で
あり、胸裡は皎々として霜雪のようである。
常に至誠を以て人に交わり、諄々として人を
感化する。故に先生は口は喞ではあるが一た
び言を発すれば、満堂肅然として聴衆は皆耳
を傾けるのである。一挙にして米人は感嘆し
涙を流すに至らしめた。同志社に在るや四方
にその名が聞こえ、來つて教を乞う者数百人
皆先生を敬愛すること赤子の慈母に對するよ
うである。天下は靡然としてその風を欣慕
し、徳富、小崎の名士が続々として門下に輩

出するに及んで同志社の名は愈々高く、先生
の功は益々顕われた。

嗚呼、その高德が聖者に近いのでなければ、
どうしてこのようなことができるか。先
生の智は、これを窺うに愈々深く、先生の勇
は、これをはかるに愈々大、先生の徳はこれ
を仰いで愈々高く、超然として皆常人の上に
ある。これを一世の偉人と言わなければ、誰
が偉人であろうか。かつ、その死に臨むや、
精神は堅確で少しも乱れず、氣象俊拔で少し
も撓まず、言うところは皆、金銀珠玉であり
一言も私事に及ばず、從容として地図をひら
き、その計画するところを指示し、泰然とし
て死を見ること帰するが如くである。何とそ
の壮であることよ。このような泰然たる死は
古今の英傑も容易ではない、一世の偉人と言
つてもほめすぎではない。惜しいかな、天命
は絶大の志を抱く者に寿命を与えず、その事
業が終らないうちに、にわかになされて。
嗚呼、天道は是か非か。天地の神はこの偉人
を憐むことが何で少いのか、その命を奪うこ
とは酷ではないか。これを東方の浜に問うも
浜は答えない。これを西方の山に問うも山は
語らない。磯の風は独り慘然としている。山

の雲は独り暗たんとして、天地は暗く、日月は光がない。嗚呼、悲しいかな。しかしながら、先生の恩は雨の如くで誰もこれに浴するのであり、先生の徳は天の如くで誰もこれを仰がないものはない。かつ、その大業を継ぐに其人に乏しくはない。嗚呼、先生は死して瞑すべきである。

独り悲しいのは自分はこの偉人と同時代に居りながら、一度も相見ることを得ず、既に幽明を隔つ人となってしまった。自分は先生の居を訪ね、浪華の花を探ろうと思ったのであったが、昨年二月にいたって万事頓座してしまった。春夏秋冬はたちまち一つの夢のように思われる。そして、先生は今亡き人となられた。嗚呼、浪華の花は今後なお賞することができ、先生にはお目にかかることができないのである。今の世に英俊先生のごとき者があるであろうか。悲しい哉。

(以上、全集第十六卷六二、三頁)

以下少々所感を述べることにしたい。

まず、純真な高等学校に学ぶ若者の心に映った新島先生像が鮮烈に表現され、また、その死を痛恨することのいかに大なるものがあ

ったか、読者の胸に沁みるものがあることを示摘しなければならぬ。

それでは、若き西田幾太郎の目に映じた新島像はその真像を把握したものであったか。理想主義的情熱に満ちた青年の新島像は余りにも理想的人間像でありすぎたのであろうか。私には、そうは思われぬ。そこには文学的詩的表現として、また、漢文調のゆえにいさゝかその若さを感じさせるものがあるとしても、他学の先生を認識することの、その真像にせまることの適確であることに感嘆を禁じ得ないものがある。新島先生の生涯の核心、そして、その人格の真相を確実に把握し讚嘆の念を吐露しているのである。

近時、学内においても新島像の神格化に反撥してこれを人間化する思考が行われている。人間化は大いによろしい。しかし、それは人間の本質を把握することであって、これを俗物化することではない。新島先生の一生その事業がいかに艱難に満ちたものであったか、を思うとき、人間としていかに生き抜いたか、その根底にあったものは何かに新島像の焦点を求めるときではないかと思われるのである。(大学法学部教授・刑法各論・演習)

理 学 館

理化学館は明治二十二(一八八九)年定礎、翌明治二十三(一九〇)年に竣工された。建築様式は各様式の混成したもので英国風の外観を持っている。建築資金は米國コネティカット州ニューロンドンのハリス氏 (Jonathan N. Harris) の寄付による。設計者は当時神戸に住んだ英人、王立建築家協会のハンセルで、施工は小島佐兵衛という大工である。

ハリス氏は、キリスト教精神による理科教育振興、すなわち、科学の威力を神の国実現のために善用する良心の人物を育てることを目的とし、アメリカン・ボードを通じて寄付したもので、ハリス氏は八十余年前すでに達識をもって科学の威力悪用を深慮したのである。